



「100年前の観光」を観光する

古書を活用した大学教育の実例

獨協大学山口ゼミ

いまから120年あまり前に設立された「喜賓会」は、多数の欧文出版物を刊行し、訪日外国人客の誘致に尽力しました。その一つ、*Useful Notes and Itineraries for Travelling in Japan*には、いまも有名な観光地だけでなく、すでに消滅した観光施設、サービス、商品などが紹介されています。

この喜賓会の英文ガイドブックに着目した獨協大学外国語学部交流文化学科の山口ゼミでは、現在、「100年前の観光を観光する」研究プロジェクトに取り組んでいます。これは第12回・たびとよカフェ（2018年2月開催）および『観光文化』第236号で報告されたツアー・リズム・リテラシーの実践であり、今号の座談会で取り上げた古書を活用した大学教育の実例でもあります。

学生たちは喜賓会の英文ガイドブックから自分で研究対象を選び、「旅の図書館」や大学図書館で調査を重ね、古書が伝える「消えた観光」の価値を考察した

一文を著しました。ここではゼミの研究結果から、2つの作品をご紹介します。いずれも喜賓会の英文ガイドに掲載された広告のうち、①は「金幣（金兵衛）写真館」、②は「軽井沢ホテル」について調べたものです。

日本と西洋が出会い交流して生まれた観光文化は、いわゆる和洋折衷や和魂洋才とは異なる水準の自律した文化であり、「ハイブリッド」や「ハーフ」ではなく、「第三文化（Third Culture）」として位置付けるべきではないか、という視点から、100年前の「消えた観光」の価値を論じています。

この研究成果の骨子は、観光学術学会・第7回大会の学生ポスター発表の部で発表し、最優秀賞を受賞しました。いまだ試行錯誤を重ねている途中ですが、今後も「旅の図書館」の研究資源を活用させていただき、さらなる研究の深化に努めます。

（山口誠）

① 「NIPPON」と出会う大通り

いま横浜の港街の中心部をつらぬく、日本大通り。150年前、ここは日本と西洋の境界線だった。その通りの向こうに広がる外国人居留地である「JAPAN」が生まれた。

それは西洋出身の写真家F. ベアトが1863年ごろから手がけた、日本の人物や風景を撮影して着色した写真であり、のちに横浜写真と呼ばれる観光土産である。西洋のまなざしを色濃く反映した「JAPAN」のイメージは居留地で流行し、横浜写真は多数の写真館で制作されるようになった。

やがて1881年、ある日本人が写真館を開業した。ベアトの直弟子で、

その「まなざし」を吸収した日下部金兵衛だった。フジヤマ、サムライ、ゲイシャなど典型的な演出写真を得意とし、鮮やかな絵具で着色された金兵衛の横浜写真は、師を超える成功をみた。だが写真史では、西洋への媚売り、または偽物の日本イメージとして、長らく顧みられることはなかった。

たしかに金兵衛の写真は、ありのままの日本の姿とはいえない。しかし西洋のオリエンタリズムに媚びるだけの「JAPAN」とも言い難い。日本と西洋の境界線に長らく生活した彼は、その二つの「まなざし」を血肉化し、若いころ学んだ焼物の絵付の着色技法を駆使して、独自の「NIPPON」を表現した。それは「日本」でも「JAPAN」でもない、第三文化（Third



「旅の図書館」を訪問する獨協大学山口ゼミ



Cultures) 2) の「NIPPON」だったといえる。

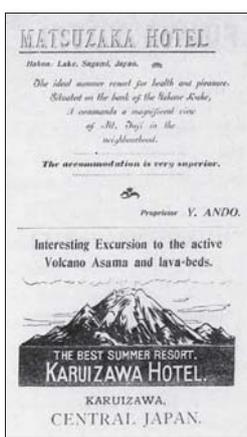
もちろん金兵衛の写真に映し出された「NIPPON」は、どこにもない。そこに足を運ぶこともできない。それでも、あるいはそれだからこそ、居留地の外国人たちは彼の写真館を訪れ、



Useful Notes and Itineraries for Travelling in Japan (第8版、1910年)



「金幣(金兵衛)写真館」の広告(第5版、1907年)



「軽井沢ホテル」の広告(下半分、第5版、1907年)

ヘアト仕込みの西洋の写真術と日本の伝統的な彩色技術が交流して生み出した、息を呑むような色彩を湛えた「NIPPON」のイメージを求めたのだろう。

その居留地も、金兵衛の写真館も、もはや消えてしまった。しかし日本大通りは、いまでもまだある。そこはかつて日本と西洋の境界線だったが、いまは過去と現在の境界線かもしれない。この大通りの向こうに広がる世界を想像しながら観て歩けば、彼方に消えた「NIPPON」と出会うことができるはずだ。

(中植渚、片山さつき、榊原瑠美)

② 「消えたホテル」から観える未来

日本を代表する避暑地、軽井沢。その原点には、カナダ人宣教師A・C・シヨーが西洋式の別荘を建て、重要な役割を果たしたことが知られている。だが軽井沢には個人所有の別荘だけでなく、ホテルも存在していた。喜賓会のガイドブックに広告を掲載した「軽井沢ホテル」も、その一つだった。

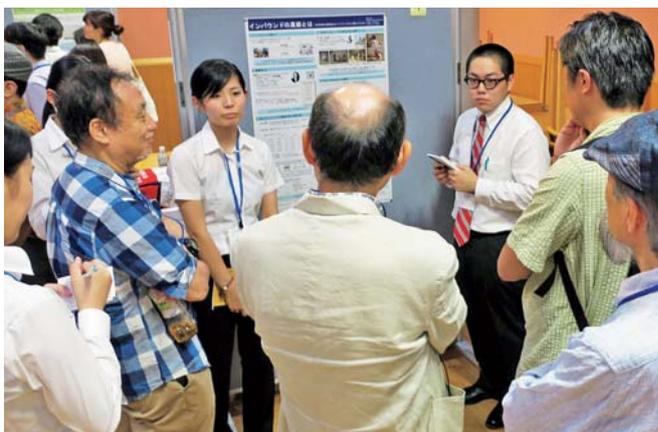
中仙道の宿場町として江戸期に栄え

た軽井沢には、本陣をはじめ多数の旅館があった。明治期に鉄道が敷設された影響で軽井沢宿はひとたび廃れたが、外国人や洋行帰りの日本人が集う国際的な避暑地として再生した同地には、さまざまな別荘に加えて、客室にベッドや洗面台や浴室を備えた西洋式のホテルも建設された。なかでも旧軽井沢宿の本陣の主が1900年に開業した「軽井沢ホテル」は、新しいアイデアを高次に実現したことで、人気を博したと伝えられている。

そのアイデアとは、広縁のある客室だった。広縁は、客室の窓辺の小さな空間であり、客室内に作られた縁側の一種ともいえる。旅館や社寺など伝統的な日本建築では珍しくもない広縁だが、それをベッドや浴室を備えた西洋式ホテルの客室に取り入れたことで、宿泊者は広縁の椅子で談笑し、室内にいながら窓の外に広がる庭や、その後方に開けた景色を感じることができた。室外と室内を明解に切り分け、頑丈な壁で仕切られたホテルの居室に慣れた西洋人にとって、「軽井沢ホテル」の広縁が実現した内と外の融合空間は、独特な価値を發揮したと考えられる。それは日本の伝統旅館でも、また西洋

を模倣したホテルでもなく、その両者を交流させて実現した第三文化(Third Culture)のホテルだった。いまはもう「軽井沢ホテル」は現存しないが、そこで育まれたアイデアは日本各地のホテルに継承されている。時を経て、久しぶりのインバウンドの活況に沸く現在、新たな第三文化のホテルが誕生することも、期待できるかもしれない。

(山本満莉奈、阿部美咲、志村琴乃)



観光学術学会・第7回大会(2018年7月)での研究発表